

2016年3月6日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 18章 9～18節

説教：王の子を殺してはならない

あらすじ

ダビデの息子であるアブシャロムは、イスラエルの王となるために兵を集め、エルサレムに入城します。これを知ったダビデは大急ぎで荒野に逃げ延び、今のことばで言えば難民となってしまいました。大混乱の中で、ダビデの家来たちは次々とダビデを見捨てて、敵の側に寝返っていきます。このようにして、イスラエルはダビデの側につく者と、アブシャロムの側につく者へと分裂してしまいます。ダビデは、息子と戦うようなことはしたくはありません。けれども今やアブシャロムは父ダビデを殺すために、兵を引き連れてこちらに向かってきています。事態がここまでくるともはや戦争は避けられません。ダビデは、ヨアブをはじめとする三人の将軍に兵を委ね、軍隊を出すことにします。

## 1 ダビデ

### 1) 長男アムノンをさばけなかった

アブシャロムは父を殺そうとしています。なぜそこまで父を憎むのでしょうか。話はずっと以前のことにさかのぼります。ダビデにはアムノンという名の長男がいました。アブシャロムから見れば兄にあたります。このアムノンが、あるときアブシャロムの妹であるタマルを辱めるといふ事件が起こします。ダビデはこのことを知ったとき激しく怒ります。そして当然人々は、父親として、あるいはイスラエルの王としてこの事件をさばくだろうと期待しました。ところが、いつまでたってもダビデは何もしません。まるでな

にもなかったかのようにアムノンは日常を過ごしている。頭に来たのはアブシャロムです。自分の妹にひどいことをしておきながら、誰も責任をとらない。そんなことがあっていいものか。もう腹の虫がおさまりません。とうとうアブシャロムは兄のアムノンを殺してしまいます。

アブシャロムが父親を強く憎み、殺そうとまで考えていったのは、これらの事件が関係しています。皆さんも気がついておられるとおり、最初にアムノンが事件を起こしたとき、ダビデがきちんと対応をしておけばこんな事にはならなかったはずです。ですから、アブシャロムにもそれなりの言い分があるのです。

## 2) ダビデの罪が与える影響

ダビデは聖書の中で素晴らしい信仰者のひとりに数えられています。そんなダビデが息子のことになると、とても理想的な父親であったとは言えません。どうしてそうなるのでしょうか。アムノンの問題、アブシャロムの問題。すべて元をたどっていけば結局ダビデ自身の罪の問題に行き着くのです。

まだダビデが若かったときことです。彼は人妻であったバテ・シェバと姦淫の罪を犯してしまいました。最初ダビデはなにごとにもなかったかのように自分の罪を隠していたのですが、預言者ナタンから罪の告白をするようにせまられました。ダビデは「私は主に對して罪を犯した」と告白し、その罪は赦され

はしました。

罪が赦されたから、その日から完全な人になるわけではありません。やっぱり肉には罪の原理が宿ったままです。異性に対する弱さはそのままなのです。だから、息子たちが同じような問題を起こすと、うまく処理ができないのです。

ダビデの罪は、ダビデの息子たち、娘たちを苦しめていきます。そして、いまや国全体が二つに分かれて戦争をするところまで発展してしまいました。罪は私たちが考えている以上に深刻な影響を周りに与えていくのです。

ダビデはそのことに気がついています。こうなってしまったのは、自分の責任です。だからアブシャロムは死ぬべきではないのです。なんとか息子を救いたいと考えます。ダビデは頭を下げて、このように言います。5節。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」

## 2 ヨアブ

### 1) 王の子を殺す

しかし事態はダビデの願っていた方向とは逆の方向に動いていきます。ヨアブの部下が、アブシャロムが漕ぎの木に頭を引っかけて宙づりになっていたのを見つけました。報告を聞いたヨアブは、なぜその場ですぐに殺さなかったのかと部下を叱りつけるのですが、部下はひるみません。12節でこう言います。

「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手を下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな』と言って、お命じになっているからです。」

ヨアブは部下が自分の命令に従おうとしないのを見て、自ら三本の槍を手に取り、アブシャロムのところに走って行きます。ヨアブもダビデの命令を最前列で聞いていた一人です。それなのに、どうしてダビデの命令に背いてアブシャロムを殺してしまうのでしょうか。前回も触れましたが、おそらくヨアブには、アブシャロムに対して個人的に恨みがあったのが原因の一つと考えられます。しかしそれだけではなさそうです。

### 2) 王の子が死んだとき戦いは止む

16, 17節を読みます。「ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民たちを止めたからである。人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。」

もしヨアブがアブシャロムを殺さず、生きてたまま捕らえたのならどうなったであろうかと思います。敵であるアブシャロムの軍隊、ここではイスラエルと呼ばれていますが、彼らは素直に天幕に帰ったでしょうか。いや、負けたことを認めず、アブシャロムを取り戻すためになお戦いは続いていったのではないのでしょうか。

ダビデの側にしてもそうです。アブシャロムのおかげで自分たちは大変な目に遭ってきたのです。宮殿を追われ、難民となり、多くの財産を失い、友だち、親戚も去って行った。大きな犠牲を払ってきた。みんなアブシャロムのせいです。そのアブシャロムをゆるやかに扱ってくれと、言われても納得できない。その不満と怒りは必ずどこかで爆発し

ただろうと思います。結局、アブシャロムを生かしておけば、また新たな戦争が始まったかもしれません。また人が殺されていきます。いつまでも人と人が憎み合っていたでしょう。

ヨアブのやったことは、今の私たちの目から見れば残酷なことに見えるでしょう。けれども、アブシャロムひとりが死ぬことによってイスラエルの中で戦争が止んだ、人殺しが止んだ、と言うこともできます。ヨアブが、ダビデの命令に背いてアブシャロムを殺したのは、おそらくそのようなことを考えてのことだと思われま

す。でも一つだけ疑問が残ります。ヨアブがアブシャロムを殺したことは重大な命令違反ではなかったのか。それも王の息子を殺したのですから、大変な犯罪ということになります。ヨアブの部下は、たとえどんなにお金を積まれてもそれだけではできないと恐れたほどです。ヨアブは、軍法会議にかけられ、処罰を受けなければならぬはずですが、でも不思議なことにダビデはヨアブを処罰しません。どうしてか。

ダビデがバテ・シェバと姦淫の罪を犯したときのことで、預言者ナタンはダビデにこう告げていました。「しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

アブシャロムが父に剣を振り上げ、反乱を起こしたのは、元をただせばすべて自分がバテ・シェバと関係をもったことが原因です。ナタンは、その結果ダビデの子どもが死ぬことになることを預言しました。その預言のとおりアブシャロムが死にました。直接にはヨアブが殺したように見えますが、ダビデが殺し

たようなものなのです。ヨアブの責任を問うことはできません。ヨアブが、王の子どもであるアブシャロムを殺したとことの責任を問われなかったのはこのような事情があったためでした。

### 3 アブシャロムを通して見えてくる主の姿

#### 1) 天と地との間に宙づりになる

いつもくり返しますが、聖書はどこを開いても救い主イエス・キリストを指し示しています。ここでは、アブシャロムを通して主の姿を見ることが出来ます。二つ挙げることが出来ます。一つ目は9節。「アブシャロムはダビデの家来たちと出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな檜の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が檜の木に引っかかり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。」

皆さんの聖書には、「彼は宙づりになった」というところに米印がついていて、下の欄には「天と地との間に残された」と直訳できると説明があります。こんなことが起きるのかと驚きますが、それはともかく、天と地との間に宙づりになったアブシャロムの姿、そこから何かを思い浮かべないでしょうか。そう。イエス・キリストの十字架に似ていないでしょうか。

#### 2) 名を思い出すために一本の柱を立てた

アブシャロムを通して主の姿が見える箇所。その二つ目は、18節です。「アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「わたしの名を覚えてくれる息子が私にはいないから」と考えていたから

である。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。」

今なら記念碑を建てることは当たり前かもしれませんが、ダビデの時代にはこのような習慣はなかったと言われています。それほど珍しいことをアブシャロムがしたことになります。

ダビデの時代からおよそ千年経ったとき、父なる神の子イエス・キリストは、王の子と言う身分でありながら、天と地との間に宙づりにされ、槍で刺され、殺されました。アブシャロムが死ぬことで争いが止んだように、罪の世をきよめ、平和がもたらされるためには、王の子が死ぬ必要がありました。そのようにしてくださった主の御名を、私たちはどこで思い起こすのでしょうか。主を立ててくださった祈念碑があります。私たちは十字架に立ち返って、この方が何をしてくださったのかを思い出します。

主が十字架で死ぬとき、父なる神はどのように苦しんだのか。そのことはダビデを通して見ることになります。